
正戯

川喜多 瞳一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正戯

【Nコード】

N5399P

【作者名】

川喜多 瞳一郎

【あらすじ】

好き勝手な領主。今度は戦争をやるらしい。税の回収を早めて、ついでに村の女も連れて行った。いつもだったら、娘を連れて行かれた家族を、上っ面だけ同情して、それであれば戦が終わるのを待つだけだった。なのに……どうしてアイツも。

愛のために行う悪戯は、正義なのだろうか……。

(前書き)

好きな人は好きそうですが、嫌いな人が大半だと思います。
いわゆる、B級と言うやつです。

それでも冒険をしようとおもうのであれば……

一昨日の朝は、いつも通りだった。

老いてもう若くない母が少ないおかずと少量の米で朝飯を作ってくれて、足腰が弱くなった父と三人で、小さい食卓に向かっていた。昨日の朝は、絶望的だった。この近くで戦争をするらしい。戦火は当然、ここまで来るだろう。刀を持ち、鎧を身に纏った武士が家の戸を問答無用で開き、その中にいる百姓を殺していくのだ。

そうした行動で『蓄え』を奪われ無いようにするためか、徴税が早まり、その量も多くなった。

自分の事しか考えていない、あの領主の事だ。百姓を虫か何かだと思っているあの領主は、戦に備えて虫の食料をあるだけ持っていて、き、ついでと言わんばかりに女を連れて行った。我が家の女といえは老いた母しかいなかったから、連れて行かれる事はなかったが、聞くところによると、あの丸々と太った領主が直々にやってきて、「兵の士気を高めるためには女子《おなご》が必要だ」とか言っていて、若い女を連れて行ったのだそうだ。残された家族はすすり泣く限りだ。

幼馴染のそれも連れていかれてしまった。幼いころにはよく遊び、お互いに好いていたのだと思う。

両家の父母も、行く行くは婿に、嫁にといって、俺達を赤面させ、困らせてくれたものだ。

だがそれが終わってしまった。連れて行かれた女がどうなるかなど、考えたくもない。

俺達は未だお互いの心中を語った事が無いし、肌など合わすはずもない。俺達と同じような関係の者達が、はたして何組みいたんだろうか。領主は俺達のそんな感情を踏みにじって、女を片っ端から連れて行き、きつと逃げられないように足の腱を切って、恥辱の底に沈めて行くのだろう。

それが、我慢ならなかった。

田畑はいい。何度でも耕せるし、何度でも実を成らす事が出来る。だが、人間はそうはいかない。恐らく、あれらはもう戻ってくる事は無いだろうと思う。兵士の性欲を満たすために、この戦が終わった後も城の馬小屋同然の蔵の中で縛られるのだろう。俺が好いた、あいつも。

だから、今日の朝は誰よりも早く起きて、戦をやっているという、あの小山の向こうへと脚を運んだ。

まだ始まって無いのか、喧騒は聞こえず、開けた荒野は静寂を守っていた。

草木を手で退かし、そこから戦場となる場所を見ていると、近くに人の気配がした。慌てて身をかめ、その正体をみると、どうも武士だ。赤い錆色の鎧を着て、頭にはそれと同じ色の傘の様な物を付けている。……名など知らぬ。所詮百姓、持っている知識は田畑のものだけ良いと、父からよく言われていた。

武士はどうも、用を足しに来たらしい。鎧っている状態ではそれが出来ないと感じたのか、武士はそれを脱ぎ出す。

好機だ。

手頃な大きさの木の棒を持って、回り込むようにして近づく。武士はこちらを向いて用を足しているため、周って後ろから攻撃する様にするのだ。しかし、ここは山の中。

不注意で踏んだ木の枝が、ピシッと音を立てる。

「何奴！」

やはり腐っても武士なのか、男根を晒しながらも声と顔には殺気が宿っているのだから称賛に値すべきであろうが、生憎とそんな暇はない。

走って、勢いを付けてその顔面に木片を叩きつける。

力を込めた甲斐があったのか、武士は大きく飛んで、背中から地面に落ち、そして動かなくなった。

殺した。否、まだ殺していない。こいつも兵の一人。さらった女

に辱めを与えた者かも知れない。

視界の端に細く、長いものが写る。

刀。

鎧と一緒に、無造作に置かれている。それを手に取り、鞘から身を抜く。朝靄《あさもや》が未だ晴れておらず、日の光も無いのに銀の刀身は綺羅と輝く。人を刺し、斬るために在るこれを、半瞬俺は美しいと思った。

動かぬ武士に目を向けて、そちらに歩き出す。その首の横に刃を突きたて、目を瞑って一呼吸をする。

殺生をする。

そう自覚して、目を開ける。鼻が折れているその顔を目に焼き付けて、刀を勢い任せに振りぬく。首は簡単に落ち、見たことも無い量の血が断面から噴き出している。断続的に、勢いよく吹き出していた血は、しかしすぐに止まる。

不思議と、吐き気はしなかった。

後悔もしていないようだ。

ともあれ、人を殺めた。それも武士を。

偶然だというのに、体には力が満ちているようだ。

今なら、誰でも殺せる。

そう思った俺の体は、いつの間にか小山を下り、未だ双陣が睨みあっている荒野へと繰り出していた。

片手に刀を持って、向かう先は、領主の陣。

幾千人の兵士が隊列を組み、戦が始まるのを待っている。

そこへ、歩いて行く。

やはり一目で百姓だと分かったか、列の最前に居た武士がこちらへ駆けよってくる。俺は刀は獲ったが、鎧は獲らなかった。纏い方なんぞ知らぬし、なにより重くてただ邪魔になるばかりだったからだ。

「おい！貴様、ここは戦場だぞ！」

喚き散らしながら武士が走り寄って来る。先程の者と同じ、錆色の鎧だ。

それが走り寄って来るのを見て、思った。

——この男も、さらった女を犯したのだろう。

気付けば、武士の喉に何かが刺さっていた。鋼色の、細く、長い、刀。どうも俺が無意識の内に刺してしまったらしい。しかし謝る気は無い。そのまま引き抜くと、血がそこから吹き出てくる。苦しそうに嗚咽をたらし、武士は自らの首を絞めるが、すぐに息絶える。

——善い事をした。

心中にはそんな言葉しか無い。

だが、それだけでは終わらない。短いながらも一部始終を見た兵士たちが、一斉に得物を手に持ち、俺に駆けよってくる。

——これらも、皆、女を……

先頭の者の首を刎ねてから、その後ろに居た槍兵の両の手を切り落とし、並んでいた二人の武士を、正面から一度の突きで刺し殺す。四人。返り血で、紺だった浴衣が赤に染まる。そしてまた、幾人も幾人も、槍や刀を携えて、百姓の男を切りにかかろうと近づいてくる。

斬りかかって来た武士の威勢の良い事。上段からの両断を、刀身を横に構えて受ける。力任せに弾き、隙が出来たその腕を貫う。と、手に束ねた糸を切るような感触が伝わってくる。ブチブチと、確実に切ってはいるが、骨に当たると止まってしまう。

もう五人斬っている。切れ味が悪くなるのかもしれない。

上腕の筋肉を裂かれ、その激痛に絶叫を上げながら倒れる武士の周りを見やる。あった。まだ一度も使われていない、新品の殺人器。手に持っている物を捨て、そちらに取りかえる。拾った刀を、地面に突き立てるような挙動でもなく武士の喉を破壊する。得物を握る手には、果物を刺した時の様な感触が伝わる。喉仏だろうか。

刀を刺したまま、辺りを見回すと、完全に囲まれている。何人いるか分からない。

だが。

それでも。

斬る。

斬りながら、竹を加工して作られたと思しき彼の柵へと近づいて行く。大将、即ち領主はあそこにいる筈だ。そして、大将に近づくとつれ、兵の数は増して行く。こうも塞がれては通りづらい。だから斬る。十人増えれば十人斬り、二十人増えればそれだけ斬る。

既に百人程は斬っている。刀は三人斬るごとに、その死体から新品を貰って進む。纏う服は血を吸って重くなり、拾ったばかりの、鋼の色を鈍く空《くう》に晒していた刀は、人の血と油にまみれ、刃が通りにくく、鈍《なまくら》になって行く。

そんな俺を見ても尚、鎧った兵士達が各々の得物を携えて立ちほだかる。

大変、可笑しい。

最初は木の棒で一人を不意打ちした所から始まった。気を失ったソレの刀を鞘から盗み抜き、首を刎ねた。次に、俺を戦場から追い出そうとした武士の首を刺し貫いた。鎧を着ていたが、意味を成していなかった。意味を成さない物など、何故着る必要があるのか。ただ足が重くなるだけだ。

兜を被っていようが、首を刎ねれば逝く。

籠手を着けていようが、手を落とせば闘えぬ。

脛当を履いていようが、足を奪えば立てなくなる。

鎧はただの気休めである。守るべき所は何一つとして守れていない。だから俺は着ない。盗らない。

たかだか農民の、素人同然の、まだまだ『若い』と言われる程度しか生きていない男一人に、本来なら数千数万の敵と戦わせるために集めた兵が屠られて行くのだ。

これほど可笑しい事は無い。口元もつい、歪んでしまう。

つらつらとそんな事を考えながらも一人、また一人と切り殺して行き、刀を交換する。既に斬った数は二百を超えているだろうか。それなのに、熟れた兵士軍はまだ俺の体に傷一つ負わせる事が出来ていない。

ここまで来て、やっと何かが間違っている事に気付いた兵士が出て来た。しかしそれは、『兵士』を『兵士達』と複数形にして呼び改めるには、あまりにも少ない数だった。その他の大勢は、未だ俺を冥途へ送ろうと斬りかかって来る。

前から、右から、左から、後ろから、斬りかかって来る。四方向から、計六人。

楽だ。もう少し考える事は出来ないのか。

こちらは前へ突き、と見せかけ、足を後ろへ運びながら刀を持ち替えて、後ろの者の喉を貫う。後ろ突き、とでも言うべきか。音を漏らす肉塊の喉を横に裂き、左の者の手を断つ。右から斬りかかって来た者は蹴り倒して足に己が得物を突き刺し、その者が落とした刀を今の得物と交換化する。

残り三人は、どう調理しようか。

大将までは、あともう一息だ。

俺の背後には、首を亡くした胴体や、手を刈られた者、二度と立ち上がる事の出来ない塊が血の池を作っている。

今一度、血を吸って重くなった服を絞り、刀を交換する。一息ついて、一步前に出た時、矢が飛んできた。的確すぎる狙いは、一步右へずれる事で避けたが、無論それだけでは終わらない。三列に並んだ弓兵が、一斉に空へと矢を放つ。右方向へ走って、気休めの回避を行いつつ、身に当たりそうな矢を刀で弾く。弾く度に高い音が鳴るのは、矢の先も鉄で出来ているからか。

味方の歩兵がいなくなったから、弓兵を出したのだろうが、あれらもまた領主の犬。

――斬って、問題は、無い。

刀を左手に持ち替えて、右手でもう一本を拾う。二刀流だ。剣の林を抜けた今、矢の雨を抜けるには手数が必要となる。

右へ走っての回避を止め、今度は弓を構える雨雲へと突進をする。矢はすぐに放たれ、俺を射ぬこうと真っ直ぐ飛んでくる。忌々しい。性根が曲がっているあれらが、真っ直ぐ飛ぶ物を使うなど、笑止。利き手である右手で矢を弾きつつ、左手を体の側面に貼らせて、打突の構えをとる。高い金属音を荒野に響かせて、俺は、弓兵に……接触する。俺を至近距離で射ぬこうとしたのか、矢と弦が引かれている状態で俺は彼の前に躍り出た。弓を射られたら死ぬ。だから弓と弦を打突で千切り、そのまま刃先を眼に通す。瞬間、今までで最も大きな絶叫が聞こえた。穴の空いた目からは赤い血と、透明な何かが流れ出てきている。これも五月蠅くてはこちらの精神が乱れるので、その首を刎ねておく。

周りの弓兵が一步引く。

新たに弓を射る者は誰ひとりとしていない。

もはや眼前である柵を見れば、ここはどうやら入口らしい。白い布地に領主の家紋が貼られた垂れ幕を、切って中に入る。

当然と言えば当然か、侍が斬りかかって来た。右で流し、左で兜の下、首を狙うが外れる。なるほど、強い。威張り散らすだけの事はある。獲物を捕らえられなかった刃を、流れるような動きで元の構えに戻す。

――構えに癖がある……？

流派なんぞ知らないし、構えも知らぬが、本能が何かを言っている。あの構えは……、刃が少しだけ外を向いている。こちらが喉を突こうとすれば、あの刃先を下に下げ、斬り上げて手を切断、そこから一刀両断を促すものか。一刀両断と言う事は、相手が想定する敵は兜を被っていない人間、即ち一般民か。解せぬ。俺達を切るために、わざわざ専用の型を用意するのか……いや、違う。

あれは俺を斬るためだけに、即興で用意したものだ。

ただの一般民にならともかく、『ここまで』来た俺を斬るために、有効打として用意したものだと言う事か。なるほど、それならば、『刃先が外側を向いている』という、玄人ではあり得ない失敗をしているのか。今作り上げたのだから、練習する暇などある訳がない。しかし、相手は侍。即興とは言え、機を与えれば必ず成功させてくるだろう。

——ならば。

乗ろう。

今まで通り、喉を突く。ただし左手で。対する敵は、やはり刀身を下げ、刃を上に向けている。このまま斬り上げられれば、手を盗られ、闘えなくなる。だが、刀を持っているのは、左手だけではない。右の刀を俺の左の手首と敵の刃の間に差し込む。鈍い金属音が鳴り、左手を失うような大事を阻止したが、相手の力が想像以上に強い。首を目掛けて一直線に進んでいた左手に、俺の右手の刀の峰があたり、狙いが逸れる。

侍は一先ず斬り抜くと、大きく後ろに下がり、今度は勢いで迫って来る。あれは、打突。首を取るか。こちらは二本の刀を体に張らせ、同じく突きを狙う。そして、この勝負、こちらの方が早い……！二本を同時に突き出す、と。敵の刃の軌道が変わる。突きから、先程と同じ斬り上げの姿勢へ。

——またアレを撃つか……！

手を盗られる前に、引き戻す……しかし、それが敵の狙い。戻される二本の刀に、侍は渾身の力を込めて斬り上げる。手に負荷がかかり、簡単に二つの得物が空を舞って行く。斬り上げの後には、両断の構え。既に昇っている陽にその身の銀を輝かせ、数瞬後には俺の血と脂で彩りを増す、その殺人剣。このままあの刃が振り下ろされれば、俺は確実に、逝く。

パアンツ！と、白刃を受け止める。

振り下ろした侍は、目を丸くしていた。こちらと同じ心境だ。

あり得ない。しかしあり得てしまったのだ、この機は逃さぬ。受け止めた刃を下に引き、敵の手から得物を奪う。よほど驚いていたのか、簡単に抜ける。その刀の空いた柄を握って、首を突く。喉に何か詰まった様な音がした。刀身を引き抜き、一振りして血を払う。俺の目の先には、大将。領主。

丸い体に無理をして鎧を着こんでいるが、俺は分かってしまったているのだ。鎧は、飾りにすぎないと。俺の前では、無力であると。

領主に向かって歩いて行くと、領主は命乞いをし始めた。

税を減らそう。土地もくれよう。金をくれよう。地位も権利も名誉も。だから、自分だけは助けてくれ、と。

俺は聞いた。

女は、どうした、と。

お前が連れて行った、村の女は今、どうしている、と。

領主の顔からは血の気が引いていた。正しく青くなっており、それが今、女達の、俺が好いたアイツの現状を全て、語っていた。

それで、もう、終わりだった。

闘う意味を意味を失くして、俺は侍の刀を持ったまま、領主の命を獲らないまま、その場を後にした。

故郷を捨てて、俺は旅に出ていた。あの侍の刀を持って。

船頭の繰る船に揺られながら、あの仕事を思い返す。それは、おぞましい思い出だった。あれほどまでの人数を殺したなど、まるで自分では無いかのようだ。正義をかざして日本を旅する俺には、到底誰にも言えぬ思い出だ。今はもう、弟子もいる。一緒に船に乗っている、まだ二十歳にならない男だ。

衝動に駆られるように、あの時俺は正義を行ったのだと、自分に

言い聞かせる。

無意味に人を殺したのではなく、意味を持って、殺したのだと。許される、殺人だったのだと……。

今の俺は、正義をかざして日本を旅しているのだ。

後ろの弟子は、俺を正義の顕現か何かだと思って着いてきている様な節があった。

——……………。

半瞬の深呼吸をして、振り返る。弟子と目が合った。そして、
「……………」

(後書き)

おそらく、ひどくつまらないものだったと思います。
それでも、よんでくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5399p/>

正戯

2010年12月16日23時25分発行